

魔王監禁しオレ様勇者に捕らえられた女魔王し

ショートストーリー

特典から数日たったある日のお話

とある日の昼過ぎ、

「……はぁ……終わった……」

勇者は一人、朝から書類整理に追われていた。

朝執務室に入るなり、机の上に山のように積まれた書類を見つけたときは軽く目眩がしたが、休憩も取らず一心不乱に片付けたおかげで、半日ほど終わったのは幸いだった。

椅子の背もたれに寄りかかり、「うーん……」と身体を伸ばす。

（戦いが終わったら、あいつともっと一緒にいられると思ったんだけどな……）

おもわず勇者の口から深いため息が漏れる。

長く続いた戦いが終われば世界は平和になると思っていた。だが現実はそうなかうまくはいかないようで、2つの異なる種族が同じ世界に生きるというのは様々な面からみて問題があるようだった。

（いや、魔王と二人でゆっくり暮らせる平和な世界を作るって約束したじゃねえか、ここで弱音なんて吐いてる場合じゃない）

勇者は弱音が出そうになるのを、頭を振ってなんとか振り払い、パンと自身の両頬を叩いて気合を入れ直す。

（まあ、まさかこんなことを思うなんて想像できなかったけどな、あいつとの出会いは俺が監禁したの

が始まりだったからな……)

勇者は魔王と出会った頃を思い出して「ふっ」と口元に軽く笑みを浮かべた。

終わった書類を整理しようと机に視線を戻そうとすると、窓の外の城の入口あたりで何者かと門番が揉めているのが目に入った。

(また城に誰か駆け込んできたのか……?)

戦争後、殆どの人間と魔族は友好的な関係を築いているが、未だに互いの種族についてよく思わないものも少数おり、何か問題が起きるたびに助けを求めて民衆が城に駆け込んでくることも少なくなかった。

「……あれは、魔王……? あんなところで何してんだ?」

何かあったのかと見つめると、そこにいるのは恋人である魔王のようであった。最近はこの城での生活にもすっかり慣れて、城内で侍女たちと楽しそうに話してる姿などをよく見かけていたが、誰かともめているのを見かけるのは初めてだった。

「……今日あいつは自室でゆっくりしているはずじゃなかったか?」

窓の外の状況に驚きつつ、目を凝らして門の様子を見してみるもここからでは何を話しているかいまいちよくわからない。

「たくっ……」

様々な疑問が頭に浮かぶが、考えるよりも早く身体が勝手に動いた勇者は急いでその場所に向かうのであった。



「全く……困ります、魔王様……！ 勝手に一人でお出かけなど、せめて従者を一人連れて行ってください！」

駆けつけると門番の困惑した叫びが聞こえてきた。

「……おいお前達……何してるんだ？」

勇者が声をかけると二人が驚きながら振り返り、従者が泣きつくように駆け寄ってきた。その従者がいうにはどうやら魔王が一人で街に出るといつて聞かないらしい。

先程言ったとおり、人間の中には未だに魔族をよく思っていないものもいるため、街中で魔王の正

体がバレてしまった場合面倒なことが起きないとは言いい切れない。

勇者が魔王のほうへ近づくと彼女は一步後ずさった。

「お前が揉めているなんてめずらしいな。一人で出かけたなんてどうしたんだ？」

そう問いかけると魔王は小さな声で呟いた。

「侍女たちが外の市場に他国の珍しい果物が入ったと言っていたのを聞いたんだ……」

「果物？」

他国の珍しい果物、確かに十分興味をそそられるものだがまだ話が見えず、勇者が不思議な顔をしていると、それに気づいたのか、魔王は少し赤くなりながら続けた。

「その果物には疲れを取る効果があるようで、勇者が、最近疲れているようだったから……」

「オレのため……？」

勇者がゆつくりと呟くと、魔王は大きく頷いた。そして、勇者のためのものだったので自分で見て直接買いに行きたかった、また恥ずかしくて侍女などには頼めなかったと話した。

魔王の優しさに勇者はおもわず抱きしめそうになるのをなんとか我慢し、門番へこう伝えた。

「まあこんなかわいい理由なんだが、オレがついていけば何も問題はないよな？」

後ろで魔王が小さく「えっ」と声を上げる。

「ええ、ですが、お二人で行かれるとなると……街のものが気づいたら……」

勇者の提案に門番はオロオロと二人を交互に見つめる。

「大丈夫だって、オレのマントを被っていけば角だって見えないし、バレるわけねえよ」

そう言いながら、さつとマントを脱ぐと、魔王の頭からすっぽりと被せる。

「ほら、これなら大丈夫だろ？」

勇者が満足気な顔を見ると、門番は呆れ気味にため息をつく。

「おい、ついてくるなんて……!」

「オレが勝手に心配してるだけだから気にすんな。ほら一緒に行くぞ」

そう告げるとまだ何かぶつぶつ呟いている魔王の手を強引に引っ張り、抱きかかえると近くの馬に

飛び乗る。

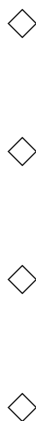
「落ちたくなければちゃんと掴まっておけよ、魔王」

手綱を勢いよく握り、

「勇者様お待ち下さい！」

慌てる門番の声の静止を振り切って馬を走らせ

た。



一人で馬に乗り、駆けること十分あまり、人々

のざわめきが段々と強くなってきた。

「じゃあ、街まではもう少しだし、ここからは馬を

止めて歩いていくか」

近くの木に馬を結びつけて、すっかり黙っている

魔王に問いかけると小さく頷き、後ろをついてくる。

「……ったく、それじゃ手繋げないだろ？ せっか

く二人つきりなんだしこっちこいよ」

後ろを振り返って手を差し出しながら声をかける。

「なあ手出せよ、ふっ……何気にしてんだ。息抜き

も大事って言うだろ？ 一日中部屋にいるのは退

屈だしな」

魔王は自分のワガママで勇者を連れ出してしま

ったのだと気にしているようであった。

「まあ今日は仕事も終わったし、こうやってお前と

一緒に出かけたかったからいいんだよ」

「え……終わったって……」

「お前と一緒にいるために終わりにしたんだよ。だ

から、ああ……そうだ、なあ、ご褒美よこせよ」

驚いた顔で見つめてくる魔王の手をそつと引いて、吐息混じりに耳元で囁く。そのまま強く抱きしめると、魔王は恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「可愛い……ここが外じゃなきゃ我慢できなかったかも、すげえたまんねえ」

ゆつくりとそう告げながら、顔を近づけ頬にチュツと軽くキスをする。

「なっ、外でそういうことは……」

満足げに笑う勇者とは対照的に魔王は恥ずかしそうに頬をおさえている。

(たく……その反応が余計に煽るんだよ)

照れくささをごまかすように軽く咳払いをする
と、まだ頬をおさえている魔王の手を引いて歩き

出した。

◇ ◇ ◇ ◇

二人がそのまま歩き続けていると段々とあたりに家や店が増えてきて活気の良い声が聞こえてきた。

「いらつしやいませ！」

店の掛け声に導かれるまま市場に足を踏み入れる。

「おい、迷子になるといけないから手離すなよ」

顔を近づけ、勇者がそう言うのと魔王は頷きながらぎゅっと強く握る。魔王は市場というところが珍しいのか、ここに来てからずっとキョロキョロとあた

りを見渡している。

「魔族にもこういうところあるのか？」

「あるにはあるが……こんなに活気はないな……」

そのままお互いの市場事情について話しながら

往来の激しい道を進んでいると、

「外国の珍しい果物が入荷したよ！」

と八百屋の活気のいい声が聞こえてきた。

声のする方へ近づいてみると、そこにはつやつ

やと輝く果実がカゴいっぱい並べられていた。

「お前が買いたかったのってこれか？」

勇者が指を指して魔王に問いかける。すると、店

主が自慢げに一つを、側にあったナイフで皮を剥い

て差し出してきた。

「これは珍しいものでなかなか手に入らないんだ

よ。一口どうぞ」

二人は恐る恐る一粒ずつ手に取り、一気に口に入
れるとみずみずしい果汁が口いっぱい広がった。

「うまいな」

勇者がそう言おうとするよりも先に、隣にいた魔
王が呟いた。

「そうだろうー？ そのまま食べてもよし、ジャム

にしてもよし、なんでも美味しい魔法の果実だよ」

うまいと言われ、店主は満足そうな顔で頷いた。

（たしかにうまいし、いくつか買っていくか）

勇者が懐から金貨を取り出し、店主に話しかけよ

うとすると横にいた魔王が身を乗り出し店主に声

をかけた。

「なるほどジャムか……！ たしかに美味しそう

だ。よかったら作り方を教えて欲しいんだが……」

「ああ、もちろん。ええと……ジャムの作り方は……」

……」

話しかけるやいなや店主とすっかり意気投合し、

パイやケーキなど他のお菓子についても楽しそう

にスイーツ談義に花を咲かせている。

（魔王が楽しそうでよかった）

はじめのうちは一生懸命話している姿を微笑ま

しく見つめていたが、時間が経つにつれ段々と自分

以外の男と魔王が楽しそうに話しているのが気に

食わなくなってきた。

（……たく、あいつ楽しそうにしすぎだろ、オレと

いんのに……）

そんなこと考えてはいけないと思い、すぐ頭を振

るも一度思ってしまったものは中々簡単には消えてくれない。

（ここにいたら魔王の邪魔しちまうし……仕方ね

え）

いよいよしびれを切らした勇者は、果実の入って

いるカゴを手につくと、金貨の入った袋をその場所

に置きそのまま歩き出した。

「え、お客さん！　こんなにももらえないよっ！」

店主は慌てて声をかけるが勇者は立ち止まる気

配はない。少しの間固まって勇者の歩いていった方

向を眺めていた二人だったが、店主が我に返りに声

かけた。

「ええと……私はいいかから追いかけたほうがいい

んじゃないかな……？」

店主の言葉を聞いて魔王は店主に一礼し、急いで追いかけると勇者は少し不機嫌そうに果実の入った袋を馬の背中に積んでいた。

やっと追いついた魔王はあはあと息を切らしながら、勇者の行動の意味がわからず問いかけた。「なんで急に帰ってしまうんだ。まだ話していたところだったのに……」

「……わかってんだよ。そんなこと……でもお前がオレ以外のやつと楽しそうに話してるのが気に食わなかったんだよ。仕方ないだろ……」

勇者自身、嫉妬なんて自分でも子供っぽいことをしているという自覚はあった。

だがそれでも、せっかくの二人での外出なのに、魔王が自分以外の男と話しているのが少し気に食

わなかったのだ。

「ふふっ……それって嫉妬したってことか……？」
少し笑いながら問いかけると勇者は恥ずかしそうにうつむいた。

「なっ……なに笑ってんだよ。子供っぽくて悪かったな」

「いや……そうじゃなくて、すこし前なら私も一緒にひっぱっていったのと思って、勇者も少しは大人になったんだなと思っただけだ」

そう少しからかうと、勇者の顔が少し赤くなった。
「あたりまえだろ、楽しそうに話しているのに邪魔はしたくなかったんだよ」

そんな勇者の姿があまりに可愛く、魔王は近くに駆け寄るとそっと後ろから抱きしめた。

「お前が、私のスコーンを美味しいといってくれたから、ジャムにしたら合うかなと思って話を聞いただけで……別に楽しそうに話をしていたわけでは……」

ぎゅっと勇者の背中に顔を押し付けながらそう告げる。部屋などで二人のとき以外は恥ずかしがり、あまり抱きついたりしない魔王の驚きの行動に一瞬かたまりかけるものの、すぐに身体の向きを変え勇者も抱きしめ返す。

「だからわかってるって、オレが勝手に嫉妬しただけっつーか……。なあ早く帰ろうぜ。お前のスコーン食べたいんだよ」

そういった途端に勇者の腹が小さく鳴った。二人でそのまま顔を見合わせて笑いあったあと、魔王を

優しく抱きかかえ馬に乗せた。

「ふふっ、もちろん、帰ったらさっそく作ってやる、ただし勇者には味見係をやってもらうぞ」

すっかり先ほどと代わりいつものペースを取り戻した魔王が微笑んだ。

「なんだ、すっかりいつもの魔王に元通りだな。たまには外でも素直にしてくれると嬉しいけど」

そう言いながら、同じように勇者も馬にまたがり、後ろから魔王を抱きしめるような体勢で馬を走らせる。

「あたりまえだろ？ 楽しみにしてるぜ魔王。ただ、そのあとは……お前のことも食べたいけどいいよな？ チュッ」

風でなびいたマントのフードの隙間から見える

魔王の白い首筋にキスをする和一瞬でそこが真っ赤に染まる。

「……な、これだから勇者は……!」

魔王は恥ずかしそうにうつむく。そんな愛らしい恋人の姿を後ろから見つめながら城への帰路を急ぐため、勇者は馬の手綱を強く握るのであった。



一方その頃、木の陰から二人の姿を見つめるものがいた。

「あれはやっぱり勇者様と魔王様だったのか……」

それは金貨の袋を持って追いかけてきた果物屋の店主であった。

渡そうとしたものの、二人の雰囲気が出ていくに

行けず、影から見る格好になってしまったのだ。

「肖像画で見た姿と似ていたからもしやと思ったが、本当に仲がよろしいんだな……」

そう呟いた店主が市場に帰り、みなにこの話を伝え、勇者と魔王のラブラブっぷりを知るのはまだ少し先のことである。

終わり